答案落第

太宰治

青空文庫

などと青息吐息の態とやや似ている。 る公式も、 小学校の算術の問題を提出されて、 「小説修業に就いて語れ。 鶴亀算の応用問題の式も、 」という出題は、 大いに狼狽している姿と似ている。 甚だ心もとなくいっそ代数でやればできるのだが、 私を困惑させた。 就職試験を受けにいって、 円の 面積を算出す

いろいろ複雑にくすぐったく、私は、 恥ずかしい思いである。

審判 どうも話にならない。 がって、 手はじめて、 飛び込み、 スタートラインに並んで、未だ出発の合図のピストルの打ち鳴らされぬまえに飛び出し、 の制止の声も耳にはいらず、 一つの さて写真班のフラッシュ待ちかまえ、にっと笑ってみるのだが、少し様子がち はっとおのれの失敗に気づいて、恥ずかしいとも、 喝 采もなし、 満場の人、みな気の毒そうにその選手の顔を見ている。 懸命にはしってはしってついに百米、得意満面ゴ くるしいとも、 なんとも、 ールに 選

うしろの地点から走らなければならない。 きながら、 ふたたび私は、すごすご出発点に引返して、全身くたくたに疲れ、ぜいぜい荒い息を吐 スタートラインに並んだ。フライイング犯した罰として、 「用意!」審判の冷酷の声が、ふたたび発せら 他の選手よりは一米

れる。

私は、 思いちがいしていた。このレエスは百米競争では、 なかったのだ。 千米、 五千米、

いやいや、 もっとながい大マラソンであった。

選手のために、声援を与える 高 邁 勝ちたい。 私は選手だ。 醜くあせって全精力つかいはたして、こんなに疲れてしまっているが、 勝たなければ生きて行けない単純な選手だ。 誰か、この見込みの少い けれ

の士はいない

か。

そうなければかなわぬ宿命を信じていた。 おととしあたり、 私は私の生涯にプンクトを打った。 自分の生涯を自分で予言した。 死ぬと思っていた。 神を冒したので 信じていた。

ある。

思っていた。 死ぬと思っていたのは、 友人も、 そう思っていた。 私だけではなかった。医者も、そう思っていた。家人も、 そう

神は、世の 嘲 笑 と指弾と 軽 蔑と警戒と非難と 蹂 躙 げいべつ 嬌ぅ えられず、そのかわり現世の厳粛な苦しみを与えられた。私は、 けれども、 もそっけもない、 私は、死ななかった。私は神のよほどの 寵 児 にちがいない。望んだ死は与 ただずんぐり大きい 醜 貌 の三十男にすぎなくなった。この男を と黙殺の炎の中に投げ込んだ。 めきめき太った。

男はその炎の中で、 んも愛くるしさがなくなった。 虫のように、 大にするだけであろうから、男は、 もそもそしていた。 しばらくもそもそしていた。苦痛の叫びは、 おそろしいことには、 あらゆる表情と言葉を殺して、そうして、 男は、 いよいよ丈夫になり、 いよいよ世の嘲笑の声を ただ、 みじ ŧ

問は らだの丈夫なところだけであった。 るまい、とファン囁き、選手自身もひそかにそれを許していた、 選手には、 太宰治とやらいう若い作家の、これが再生の姿であろうか。 変れば変るものである。 まじめ。 無し、すべてに無器用、熊の手さながら、 この選手、 見込みがある。 へんに、まじめになってしまった。そうして、ふたたび出発点に立った。この 全然見込みがない。足が重すぎる。見よ、 競争は、 五十米レエスならば、まず今世紀、 マラソンである。 おまけに醜貌、 百米、 頭は、 二百米の短距離レエスでは かの鈍 かれの記録を破るものは たった一つの取り柄は、 わる かの俊敏はやぶさの 重、 Ų 牛 · の 如 文章は下手、 き風貌を。 如き

あ

か

長生きするのではないか。

こんな、ばかばなしをしていたのでは、きりがない。何かひとつ、実になる話でもしよ

どうなるのですの? うかね。 この世界はどんなになるか、 う話しが たところ、一貴婦人から、けれども博士、 おまえは何を建設するのだい? と質問 あるけれども、 実になる、ならない、もへんなもので、むかし発電機の発明をして得々とし と質問され、 何千万年まえの世界には、どんな動物がいたか、一 そんな話は、 博士大いに閉口して、奥さま、生れ その電気というものが起ったからって、 いったい実になるものかどうか。 してみて下さい、と答えて逃げ去った たば 億年 私は実になる か りの Ò それ とか 赤 ちには う い 6 坊

話だと思っているが。

ない。 中にも 思案深くなるだろう。 どは、はっきり、 を非難しようとは思っていない。 いうのである。 ヴァニティ。 いる。 はっきり向き直って、おのれのヴァニティと対談してみるがい 牢獄の中にもいる。 この 見た、 合せ鏡して見とどけて置く必要は、 強 動 関 結果はむりに人に語らずともよい。 謙譲になるだろう。 をあなどってはいけない。 ただ、おのれ 墓地にさえ在る。これを、 神の問題を考えるようになるだろう。 のヴァニティを鏡にうつしてよく見ろ、 ある。 虚栄は、どこにでもいる。 語る必要はない。 いちど見た人は、 見て見ぬふりをしては、 い。 私は、 その人は、 が 人 への虚栄 僧房の 1 け

重ねていう。

私は、

ヴァニティを悪いものだとは言っていない。それは或る場合、

生活

家たちが、信仰や宗教を説いても、その一歩手前の現世のヴァニティに莫迦正直に触れ意慾と結びつく。高いリアリティとも結びつく。愛情とさえ結びつく。私は、多くの思 多くの思想

いないことを不思議がっているだけである。パスカルは、少々。 ヴァニティは、 あわれなものである。なつかしいものである。それだけ、

閉口なもので

ある。

思うな。 ながいことである。大マラソンである。 ゆっくりかまえて、一日一日を、 せめて悔いなく送りたまえ。 いますぐいちどに、すべて問題を解決しようと 幸福は、 三年おく

れて来る、 、とか。

青空文庫情報

底本:「もの思う葦」新潮文庫、新潮社

1980(昭和55)年9月25日発行

1998 (平成10) 年10月15日39刷

入力:蒋龍

2004年6月16日作成校正:今井忠夫

青空文庫作成ファイル:

ました。入力、校正、制作にあたったのは、 このファイルは、インターネットの図書館、 ボランティアの皆さんです。 青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られ

答案落第

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/